

十四人の 信長

講談社編



講談社

十四人の信長

講談社編



十四人の信長

一九九一年二月二〇日 第一刷発行

著者——ながよ よしろう長与善郎ほか

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号——一一二―〇一

電話——編集部 〇三―五三九五―三五〇五

販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所——信毎書籍印刷株式会社

製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一八〇〇円（本体一七四八円）

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

©長与善郎ほか 1991. Printed in Japan

十四人の信長
目次

小説

年少信長

長与善郎
10

織田信長

坂口安吾
30

桶狭間

井上靖
58

本能寺の信長

正宗白鳥
80

惣右衛門嘆き

富田常雄
100

安土の密譚

山岡荘八
124

信長を刺した女

今東光
146

史伝・史論

織田信長

海音寺潮五郎

170

姉川の戦

松本清張

218

史論織田信長

南條範夫

250

その後の織田一族

杉本苑子

268

戯曲

増補信長記

岡本綺堂

288

若き日の信長

大佛次郎

332

信長記

石原慎太郎

370

装幀／熊谷博人
装画／風間 完

十四人の信長

小説

年^{ねん}
少^{しょう}
信^{のぶ}
長^{なが}

長^{なが}
与^よ
善^{よし}
郎^{ろう}

「おい、重箱。^{じゅうはこ}あの『晴嵐』^{せいらん}をどうじゃ。この長船^{ながふね}と交換せぬか」

「――。毎度の仰^{おほ}せながらその儀^ぎばかりは何卒^{なにとぞ}平に御勘弁を。……」

「どうしてもいやか。只よこせというんではないぞ」

「お言葉に背^{そむ}きますように、何とも恐れ入ります。他の物^{もの}なれば固^{もと}より何なりとも悦^{よろこ}んで献上いたすでございしますが、あれだけは何分にも御先代様より特に私^{わたくし}奴^めへ賜^{たま}わりましたる名馬。この五郎右衛門にとりましては命^{いのち}とも恃^{たの}みます掛け替^かえのない紀念^{きねん}のお形見^{かたみ}で△いまするで。……」

「いかにも名馬じゃから貴様には過ぎものじゃというんじゃ」

「それは存じております」

「親父は死ぬ時、貴様たち家来衆にたしかこう云ったな。そちたちは乃公^{おれ}にたいして忠実であつたように、乃公の世嗣^{よそご}ぎの信長に忠義をつくせ。それが乃公への何よりの忠義じゃ、と」

「は。――」と思わず苦々^{にくたが}しく汗ばんだ面^{おもて}を伏^おせたが、ふと苦しい理窟^{りくつ}を案^{あん}じ当^{あた}って、「されば、その忠義を立てますために、あの馬も必要なのでございます」

「ふむ。重箱を乗せた馬の方で危ない危ないと笑つてもか。はっはっはっ」

突拍子もない声ではき出すようにこう嘲笑うのだったが、この主人長い談議はきらいだった。

「よし。そんなら要らん。が、その代り重箱。貴様、馬になれ」

云ったかと思うと、もう相手のがっくり頭を垂れている四角い肩へ一寸手をかけるなり、いきなりひよいと飛び乗るように背中へおぶさった。不意を喰ったその「重箱」といわれるのが思わずよろよろと二三歩よろけるのをかまわず、足で追い立て、

「走れ。そら。あすこに可愛い女の子が行くぞ。あれを追っかけろ。はやく！」

何のことはない。もう只悪戯そのものが面白くてならない腕白盛りのように体までやんやと揺すぶるのだが、それも十歳かそこらのやんちゃならまだしも、美少年の域こそ脱しないとはいえ、当年とって既に十八歳の当主。図体ではその馬になっている男より二三寸もひよる長い位なのだから、決してみつともなくない状ではない。それが又せめて普通の恰好なら左ほどでもなかるうが、第一その風つきからしてだらしがないとも奇抜とも云いようのない珍妙さなのだ。袴なんぞは父親の葬式の時にすら穿いたことがないが、髪といえはいつも無造作な茶筌の鬘を、どういうのかまるで娘の手絡か何かのような赤や萌黄の紐でくると巻き立てている。おまけにその恐ろしく長い朱鞘の太刀を差した着流しの腰には、しょっちゅう猿廻しのもつような火燵袋をいくつもぶら下げていて、その中から饅頭だの餅だのをつかみ出しては往来だろろうが馬の上だろろうがお構いなし、何か大声に語り笑いながら鬺り鬺り歩くというんだから、どうしたって少し気がふれているか、抜けているとしか思われぬのが当り前だ。

「そ、そんなに速く走れはいたしません」

馬になった五郎右衛門は眼を白黒させ、ばかばかしさと、腹立しさと、苦しさとで、はあはあ喘ぎ喘ぎ真つ赤になっているが、さりとて振り落とすわけにも行かない。そこへ、とんとんと踏んばる弾

みに背中の上でむしゃむしゃやっている餅の餡が自分の月代から襟の中までこぼれ落ちるので、往きすがりの者は皆指をさして笑っている。大変な主人もあつたものだ。満足な名の呼び方もされないのは自分一人ではないというものの、失敬千万にも人を擱まえて『重箱々々』と仇名でしか呼ばないのさえいい加減小面憎いのに、無理な注文を拒んだばかりに己ればかりか此方までいい世間の物笑いにされていると思うと、五郎右衛門きりきりと無念の歯噛みをして、

「ええ、いっそのこと、あの祭りの人込みの中へとっ走って、うんとこさこの馬鹿殿ぶりを見せてやれ」

それもこのキ印には効き目がなさそうだとは思ひながらそんな気持ちになるのだったが、何としても荷が重すぎる上に、腰の物が股に挟まって足が云うことをきかず、只かつかと逆上せるばかり。

が、そこへ彼方から重臣の傳役、柴田権六を従えて来かかったのがこの三郎信長の直きの弟勘十郎信行で、これは又兄弟とも思われない対照、折目高の肩衣をきちんと着こなし、ぼかしの薄紫の袴も甲斐々々しく歩み寄ったが、

「兄上。——」と行儀のいい一礼で可愛く声をかけた。「どこへ。——」

「やあ勘十か」とこっちはまたしても洒啞々々としたもの、口のぐるりの粉を袖へなすりつけながら、「貴様どこへ行つた。又墓参りか」

「熱田の祭礼へ、参拝に。——」

「何だ。太鼓の音が聞えると思ったら、今日は祭りか」

そう聞くと、はじめて長い脚を地につけ、後をも見ずにすたすたその太鼓の音の方へ急ぐのだった。

後に見送った信行は、これも『蝦蟇鬚』と三郎から仇名をつけられている供の柴田と顔を見合せる

と、急に笑い出した。可哀相にもくしゃくしゃにされて了った五郎右衛門の袴が可笑しかったからでもあったが、実はそれよりもこの家来たちが自分と兄との著しい対照に何を心に思ったか、その肚の中がいよいよまざまざと読める気がしたのがいかにも嬉しいからだった。

信行ももう十五になっていた。

二

「織田の悴はうつけもの」

まるで一つの言葉のように、「ああ、あの馬鹿か」とは、ひとりこの那古野の城下ばかりの通りものではないらしかった。

「親父さんの備後守はあんな豪傑じゃったにな。二代目ときては形無しの出来損ないじゃ」

「弟の方がよっぽどしっかりしとるわ。あれがものにさえなれば、あの分家もまだ見限ったもんじゃないが。——」

「そのものになるまでの間、はたが黙って見ておるといふ筈もなしな」

こんな風に、いよいよもって弟の引き立て役ということになって了ったのは、他でもない、あの万松寺で父信秀の大法要が行われた時からの話で、それも亦その筈なのである。何しろ小さいとは云っても一城の主、しかも当の喪主だといふのに、あの氣違いじみて出鱈目な普段のままの風体でずかずか霊前へ進んだかと思うと、いきなり抹香を驚攔にくわっと位牌のあたりへ擲げつけたという乱暴さなのだから、その後へ子役といった形で静々と出た勘十郎が人並みな所作をするのがいかにも殊勝らしくも頼もしくも見えたのは道理。殊にも親族だの郎党だのとは云ったって油断も隙もならない手あいばかりがずらりと眼を光らしている手前だ。後室になった母さえ思わず手に汗を握りしめて、

「ああ、あれとあれとがせめて入れ替りの順に生れていてくれたら。——」

と嘆息したのも全く無理はなかった。が、こうなると、実は誰よりも一層心を碎いて心配するのは、先代信秀から呉々も厚くその教育指導の任を依託されている平手中務丞政秀や、林佐渡守といった三郎の傳役達で、もしほんとに三郎が出来損なつたとなれば、これはさしずめ自分達の責任と目されても致し方がない。それも只それだけのことなら、なにも主人が低能に生れたからといって家来たる者が腹を切つて旧主の霊に詫びることもないわけだが、しかしそれがためにもしそこに家督相続のいざこざまでが興つて、そのお家騒動に乗じて、今まで信秀の代に散々いたためつけられていた本家始めその他の織田一族や、これも外戚筋に当るお隣の斎藤やが攻めこんでくるというような始末にでもなるとすると、それでもおれの知つたことではないと顔を拭つてすましているわけにはいかないのだ。

そこへもつてきて、常々自分達とは一寸妙な折合いになつてゐる勘十郎の側の傳役、柴田や瀧川が、さもお家のためという恩義だてらで、

「どうも、——平手氏、あの上総介殿には困つたことでござるな。先代の御逝去からもう二年にもなり、もう腕白が却つて頼もしいというお若さでもないに、今もつてあの御不行が改まる気色も見えぬというのは、お互お家のため痛心に堪えぬことでござる」

とさも憂え気な顔で、暗に家督問題に触れることを促すのだ。それが又図々しい性分ならその位突つつかれたつて大して苦に病みもしまいが、格別にも律義一偏で通つてゐるこの平手中務にはそれがびしびしと身に沁みてこたえるので、つまりはお家第一とするか、どこまでも信長第一で立て通すか、実は内々その両筋道に迷つてゐるのである。

「いや、そういったものではござらぬ。現にあの御葬儀の折にも、あの天沢老師だけは衾と同じに